

最上川と水田稲作の受容・展開

川崎利夫

一、はじめに

最上川は山形県における人びとの生活圏である三つの盆地と庄内平野を貫流する。最上川を往来する船をみることもなくなった現在では、最上川を日常的に意識することは稀になったが、古く歴史をさかのぼるほど、この川と人びととの生活は深くつながっていた。

一九四八年日本列島において最初の旧石器が発見されたのは、最上川上流にあたる五百川峡谷の河岸段丘大隅遺跡においてであった。またその数年後に旧石器の発見が報せられた村山市河島山や寒河江市金谷原、また旧石器時代の最後の時期にあたる細石器が発掘されたのも大石田町角二山遺跡である。これらの古い遺跡は、すべて最上川を指呼の間に望む流域である。

県内に分布する縄文遺跡の大半は、最上川を望む河岸段丘やその支流の河川に関連する。東北地域に栄えた縄文文化の基底

に、落葉広葉樹の堅果とともにサケ・マスの捕獲がある。また集団間の交流のルートとしても最上川が存在が重要な意味をもつ。

弥生時代に入り、日本海を北上した渡来系弥生人により、日本列島の本州北端まで水田稲作が早い時期に伝播するが、時をへず海岸部から内陸部へ波及するものもおそらく最上川を溯行して伝えられたからに他ならない。これは気候の寒冷化などにより一時停滞をみるものの、四世紀から五世紀にかけて流域の低地帯に水田農耕が定着することになる。

また律令体制下、都から東北へ向う官道が羽羽国において陸路とともに、最上川を利用した舟運による水駅が存在したことも全国的に稀な例である。荘園の成立とともに、各地域間の交流が一層進展をみるが、荘園の政所などは、多く最上川流域やその支流に近い箇所^{まんどこう}に立地している。中世に入り武士の城館跡のいくつかは最上川をおさえる場所に築かれていることもす

に指摘されている。近世から近代にかけての最上川舟運が山形県の歴史に与えた大きな影響ははかり知れない。

以下最近における発掘調査にもとづき、最上川流域における水田稲作の成立と展開、奈良・平安時代に交易ルートとして大きな役割を果たした水駅の問題などを述べ、最上川と地域の歴史との関連についてアプローチを試みることにしたい。

二、最上川と初期水田稲作の受容

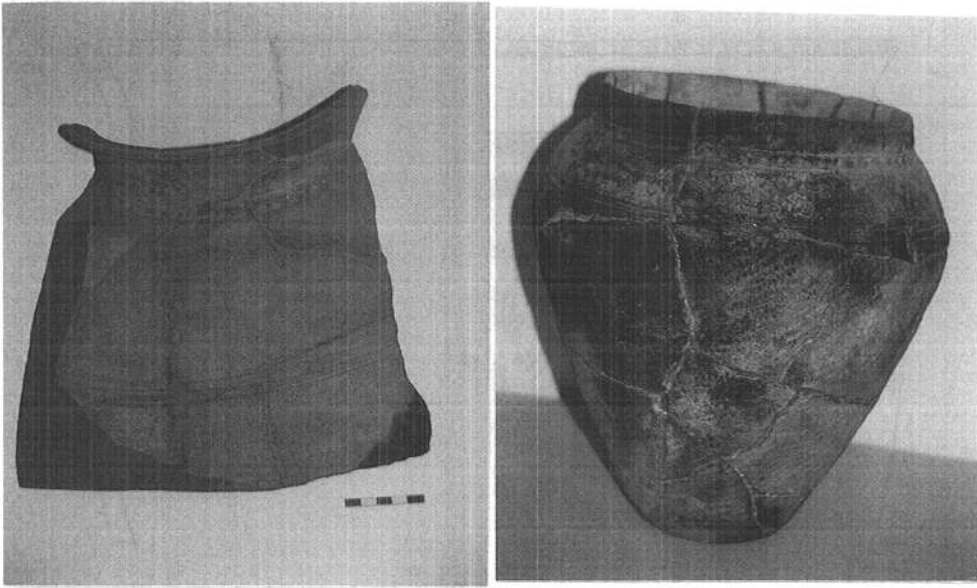
山形県の最上川流域は、日本有数の水田農業地帯と知られている。その起源はいつにあるのだろうか。いまから五十年ほど前までは、律令政權が東北へ進出する七・八世紀が水田稲作が開始された時期と考えられていた。ところが伊東信雄らの研究によって、日本列島全域に稲作が波及する弥生時代に本州北端の津軽平野や下北半島まで及ぶことが明らかにされた。一九八〇年代前半には弥生中期の田舎館式土器に伴う水田遺跡が発掘され、つづいて同じ津軽平野の岩木山北東麓の弘前市砂沢遺跡では一九八七年に弥生初期の水田跡が多量の炭化米などとともに発見された。

それと前後して新潟・山形・秋田・青森などの日本海側に弥生前期の遺跡が相ついで発見され、弥生時代が成立してほどなく水田稲作が日本海ルートで北端まで伝播したことが明らかになった。

酒田市大字生石^{おいし}登路田にある生石^{おいし}遺跡は、¹⁾一九八五〜八六年に山形県教育委員会や酒田市教育委員会によって発掘調査が行われた遺跡である。北北西五キロには平安時代の出羽国府とされている城輪^{しろわ}遺跡があり、南四キロには最上川が河口にむかって流下する。標高十二メートルの出羽丘陵に接する平野部東端に位置する。

遺跡は上層に平安時代の国府に關連する官衙^{くわんが}遺構があり、地表下五十センチの下層より二〇〇点余りの弥生土器や石鏃・石匙などの石器が出土している。それらの土器は、弥生前期の砂沢式を主体とする在地で製作された壺・鉢・台付鉢・壜などで、その中に北九州の遠賀川^{とんががわ}流域より出土し、西日本に拡散する弥生前期の遠賀川^{とんががわ}式に近似する遠賀川系土器がみられる。これらはおそらく遠賀川式土器を模倣して作られた土器である。(第一図)またこれらの土器の中には、底部に靱痕のある土器片が七点ほど認められる他は、同じ層位から炭化米が検出されている。水田遺構は発掘されるに至らなかったが、明らかに弥生前期に水田稲作が行われていたことを証明する事実である。多分日本海沿岸地域に分布する同時期の他の遺跡と同様、北九州に伝えられた水田農耕が、時をそれほど経ることなく日本海を北上してやってきた弥生人によって、米とともにその技術も伝えられたことを示すものであろう。

そして水稲農耕は、おそらく最上川を溯上して内陸部にも拡

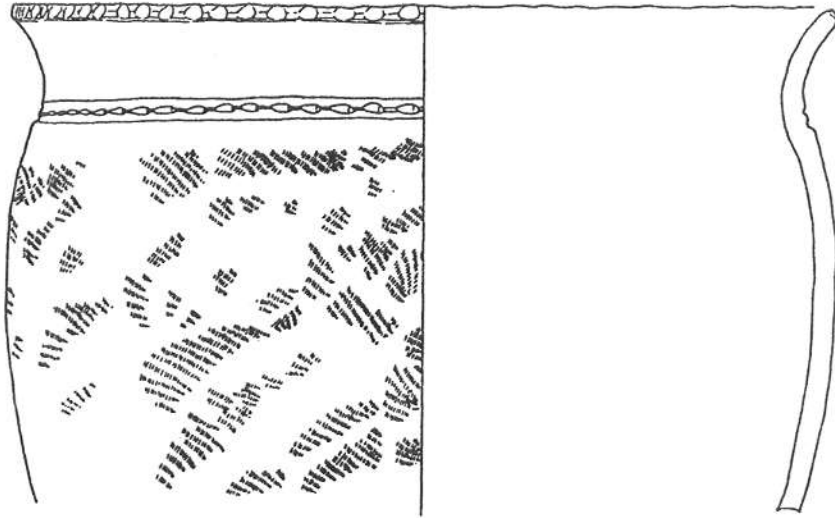


第1図 生石2遺跡出土の遠賀川系土器
左 壺上部破片 右 壺形(高さ23cm) 山形県埋蔵文化財センター保管

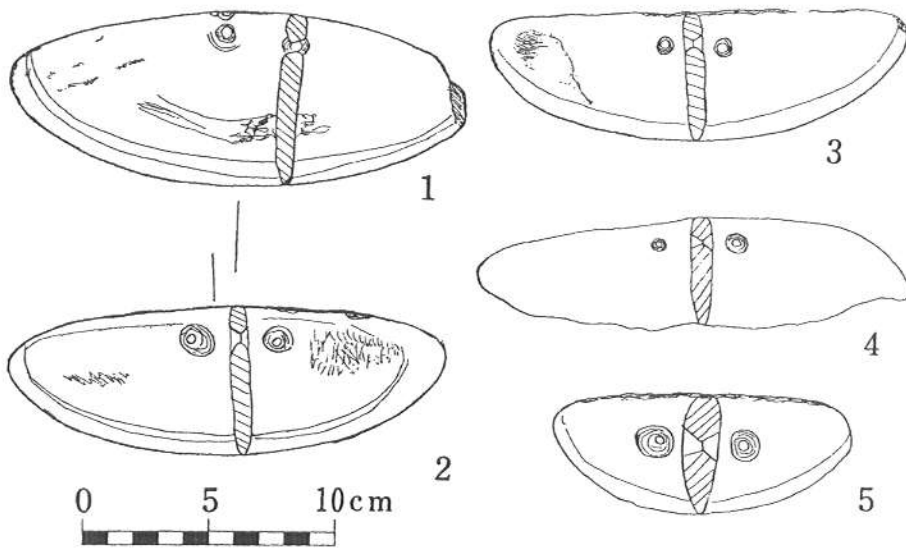
大していく。最上川と銅山川の合流点にあたる河岸段丘上の大蔵村上竹野遺跡も弥生前期の土器が出土する遺跡として知られている。標高七十メートルの地点で、数少ない最上地域の弥生遺跡である。

さらに最上川中流域の東根市蟹沢^{かたさ}や河北町花ノ木遺跡にも遠賀川系土器がもたらされる。蟹沢遺跡は東根市街の西にあり、北流する最上川の二キロ東に位置し、乱川扇状地の扇端部湧水帯に立地する。圃場整備によってほとんど破壊されたが、その前後に数回にわたって小発掘が行われ多数の遺物が出土している。縄文後期末から弥生中期初頭のⅡ期までの土器が認められ、遠賀川系土器や靱痕を有する土器も発見された(第二図)。

対岸にあたる花ノ木遺跡は最上川に近く西六〇〇メートルに位置する河岸段丘上にあり、いま工業団地となっているが、一九九六年より九八年まで河北町教育委員会によって発掘調査が行われた。縄文晩期末葉より弥生前期にあたるⅠ期と中期初めのⅡ期の遺物が出土している。弥生特有の偏平片刃石斧や石包丁なども発見されており、やはり遠賀川系土器も含まれていた。遠賀川式土器は甕にもっともよく特徴があらわれている。大きく外反する口頸部の下に直線的にめぐる二条の沈線の間を横長の刺突列点文が並び胴部にも二・三条の平行沈線がめぐり、器面はよく磨かれ平滑である。ところがこれを模倣して在地で作られた土器は、口唇部や胴部に縄文が施される。これらの



第2図 蟹沢遺跡出土の遠賀川系土器（山形考古4-2、加藤・佐藤・二瓶論文による）



第3図 山形県各地出土石庖丁（1～3. 山形市七浦、4. 山形市谷柏、5. 南陽市萩生田）

特徴をもつ土器は、北九州遠賀川流域から西日本の各地に稲作とともにもたらされた。弥生前期中頃の土器で、紀元前二世紀頃とみられる(第一・二図)。

花ノ木遺跡から発見された石包丁は、稲の穂摘みに使用された石器で、明確に水田稲作が行われていたことを示している。他に石包丁は、近くの河北町溝延・山形市七浦・同江俣・同今塚、置賜盆地の萩生田^{はぎうだ}などから出土している(第三図)。また、刃痕を残す土器は、置賜盆地の南辺の米沢市本代遺跡^{もくだい}まで及ぶ。本代からも弥生前期土器が出土している。

これらの状況からみると、日本海岸にそって北上をつづけた水田稲作を伴う弥生前期の文化は、最上川を溯上して、内陸部に余り時を経ることなく到達したのである。初めて伝えられた水田稲作の遺跡はほとんどすべて最上川の近傍に存在することから、最上川が水田稲作が伝播するルートであったことを示している。それらは弥生人が最上川をさかのぼって移住したというよりも、すべて縄文時代の終末期の遺跡から続く集落遺跡であることから、縄文の人びとが主体的に稲作を受容し、弥生文化へ変貌してゆく様相をよみとることができるであろう。

しかしながらこうして水田稲作が開始されたものの、それが順調に展開したものではなかった。紀元後二・三世紀に北半球をおそった気候の寒冷化によって一時水田稲作は停滞を余儀なくされたのである。東北の縄文社会が稲作を受容しても、西日

本にみられるような銅鐸・銅劔などの青銅器はみられず、激しい戦乱を物語る環濠集落や高地性集落も出現せず、王墓のような階級の存在を思わせる遺跡は見出すことができない。相変らず土器には弥生文化の影響を受けながら縄文が多用され、弥生文化には異質の土偶や縄文以来の石器が使用されている。

水田稲作の受容は、従来からの生業に加えて稲作という分野が一つ加わっただけで、基本的な社会の変革につながるものにはなりえなかった。縄文時代の伝統が強烈なまでに生きつづけた。それがまた稲作の停滞と軌を一にして、再び縄文への回帰を思わせるような縄文を多用する「天王山式」土器の出現としてあらわれる。天王山式は福島県白河市天王山遺跡出土の土器を指標とし、新潟県など北陸北半から東北地方にかけて広範な分布をみる。口縁部の二本の沈線の間^{くちばり}に上下から刺突を加えた交互刺突文が特徴的で、頸部より下半部は細かい縄文や磨消縄文が施される。

この土器の年代的な位置については、いろいろな論議があったが、いまは弥生後期の土器とされている。つまり紀元二〜三世紀にあたる。県内でも各地から出土しているが、おおむね丘陵地や山間部からの発見が多い。弥生前期から中期にかけての最上川流域低地部の遺跡立地とは対照的である。しかもこの時期に、北海道からの続縄文文化といわれる「後北式」^{こうほくしき}や「北大式」の土器が東北南部や北陸北部にも南下し、北からの影響が一時

的に強まる。県内でも寒河江市石田遺跡などから後北式土器が発見されている。これも日本海を経由して最上川をルートにするものであろうか。

弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、太平洋側の宮城県北部から岩手県南部にかけて、古墳時代の集落遺跡と入り組んだ形で統繩文土器が出土する遺跡が分布する。北と南の境界領域の一端がうかがわれるが、おそらく未調査の最上地域にも同様な現象がみられるものと予測される。

水田稲作がもたらされた最上川流域の弥生遺跡の様相については、集落跡や水田跡の発掘例がほとんどなく、稲作が一時停滞したといわれる弥生後期の状況についてもまだ多くの課題が残されたままである。それらの遺跡が次の温暖期に地中深く埋まってしまったとの見解もある⁴¹。

三、水田稲作の展開と定着

さて水田稲作が最上川流域の庄内平野や山形・置賜盆地に拡大し定着をみて、農耕を主体とした社会に変革し、地域の首長が出現して古墳が営まれるようになったのは四世紀であった。四世紀から五世紀にかけての古墳時代に、水田農業が画期的な展開をみせたと考えられる。

これには弥生後期の社会が自律的に発展し古墳時代へ展開したとは考えがたい。それは畿内にヤマト政権が出現することを

契機に、急速に頻繁な人どもの移動があったことを物語る。最上川流域の低地部の後背湿地を水田に開発し、扇状地扇端部の湧水帯に集落が一斉に出現するのは四世紀代の古墳時代前期である。それらの遺跡から出土する土器の中には、明らかに北陸・東海・関東の土器が含まれている。これらの集団によって最初の古墳が営まれ、これまでとは質的に異なった政治的社会が成立していくのである。

これを具体的に山形盆地を例にみてみよう。なお尾花沢盆地や新庄盆地には今のところ四・五世紀の集落遺跡は未発見である。従来から知られている遺跡の他、東北中央自動車道の建設や諸開発事業により扇状地扇端部に立地する古墳時代前期に属する集落跡が発掘調査されその様相がかなり明らかになった。それらの遺跡は、みごとに馬見ヶ崎川・須川や立谷川・乱川などの扇状地扇端部に弧をえがくように分布をみる。これらは大方最上川や須川の後背湿地を水田とし、自然堤防や微高地に集落を営んだことが観取できる。(第四図)

古墳時代前半期にあたる四・五世紀の集落分布を山形盆地においてみてみよう。上山盆地にはこの時期の遺跡は未発見であるが、山形盆地西南部にあたる谷拍・二位田・南館・前明石などの周辺には数多くの古墳時代前期の集落が分布する。蔵王山に源流を発し、山形市街地の西部を北西にむかって流れ、最上川と合流する須川の流域で、西側に連なる出羽丘陵を望む低地

最上川と水田稲作の受容・展開

- | | |
|---------------|-----------------|
| 1. 松原 | 17. 馬洗場B |
| 2. 沢田 | 18. 七浦 |
| 3. 谷柏 | 19. 大塚 |
| 4. 萩原 | 20. 川前 |
| 5. 寺裏 | 21. 物見台 |
| 6. 八丁 | 22. 高瀬山 |
| 7. 坊屋敷 | 23. 渋江 |
| 8. 南館 | 24. 三条目 |
| 9. 西高敷地 | 25. 高だま南 |
| 10. 陣場 | 26. 塚野目B |
| 11. 嶋 (国指定史跡) | 27. 西沼田 (国指定史跡) |
| 12. 川原田 | 28. 蔵増押切 |
| 13. 檢葉ノ木 | 29. 板橋1 |
| 14. 今塚 | 30. 板橋2 |
| 15. 長表 | 31. 的場 |
| 16. 中野 | 32. 原口 |



第4図 山形盆地の主要な古墳時代前半期集落遺跡の分布図 (国土地理院5万分ノ1 山形・楯岡による)

部、標高一二〇メートルの地域である。出羽丘陵の盆地にのぞむ先端部には、五世紀後半の菅沢二号墳・大之越古墳や後期以降とみられる谷拍古墳群・速見堂古墳群などがあり、早い時期に地域の政治的統合が行われたものとみられる。

馬見ヶ崎川扇状地には、その南端のやや上位に山形西高敷地内遺跡があり、縄文中期や弥生後期、奈良、平安期の複合遺跡であるが、四世紀代の竪穴住居跡が発掘されている。さらに扇端部に陣場・嶋・今塚・長表・川原田・松葉ノ木などの遺跡が分布する。嶋は一九六〇年代にその一部が調査され、鞍橋や農具など多数の木製品が検出され、稲粃を収納する高床式倉庫なども発見されて国指定史跡となっているが、古墳時代後期を主体とする集落跡であるものの、四・五世紀代の土師器も出土している。今塚遺跡は、一九九七年山形県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施され、三十棟の竪穴住居跡のうち七棟が塩釜式期の土師器に伴う焼失家屋で、同時期の一括資料が得られた。また近くの長表遺跡では五世紀代の棟持柱を有する掘立住倉庫跡が確認されている。

その北側にひろがる立谷川扇状地の南端部には、中野・七浦・馬洗場A・同B・渋江・三条目など古墳時代前期に成立したと思われる集落跡が展開するが、明治地区の渋江・三条目などは後期を主体とした遺跡である。また馬洗場B遺跡からは、五世紀代と推定される「内行花文鏡」の破鏡が発見されている。

さらに最上川に流下する立谷川を越え、乱川が形成する複合扇状地の扇端部は天童市域であるが、南から高嶺南・塚野目A・西沼田・蔵増押切・板橋1・同2・的場・原口などの集落跡が分布する。但し西沼田や蔵増押切は前期の遺物は発見されているが、後期以降の遺構が主体である。

一九八五年圃場整備にともない山形県教育委員会によって発掘調査が行われた天童市西沼田遺跡では、地下水位の高い扇状地末端に位置するために、建築部材や木製品が多数検出された。地下に打ち込んだ柱によって構成される建物跡や高床式倉庫なども含む十三棟の建物群がまとまって掘り出された。八八年に国の史跡に指定され、その後範囲確認や史跡整備を目的に引きつづき天童市教育委員会によって発掘調査が行われている。その過程で一部水田跡と思われる遺構も検出された。これらの遺跡から出土した土師器などは六世紀より七世紀初頭のものであり、後期の集落跡であるがあるが、五世紀代の遺物も僅かに認められるところから、集落の開始時期は五世紀後半にあったものと思われる。

二〇〇二年に発掘調査が行われた天童市高嶺南遺跡は、竪穴住居跡十一棟が検出され、その大部分が炭化材でおおわれていたことから焼失家屋と推定される。小河川跡からは鍬や大足などの農具も発見され、湿田経営を行っていたことが知られる。古墳時代前期の塩釜式期の土師器を主体とする集落跡で、後背

湿地を利用して水稲農耕を行う集落であることが明らかである。

それらの扇状地扇端部に立地する集落跡は乱川扇状地の北端にも及び東根市長瀨地区の扇田遺跡を北限とする。おそらく古墳時代前半期においては、この辺りまで水田開発が行われていたものと思われる。北村山の北部や最上郡の新庄盆地では、水田稲作を受容した以南とは異質な社会で、気候条件によってのみ稲作が行われなかったということはできない。つまり古墳時代前期頃は、エミシの地でありその境界にあった地でもある。

さて水田稲作が最上川中流域に定着をみせた古墳時代前期から中期にかけては、扇状地末端部の湧水帯低地部に一様に集落が出現した。これらは地下水位の高い湿田や最上川に近い後背湿地を基盤にした水田稲作経営が行われたことを意味する。そして多くみられる集落規模は小単位で、湿田を利用した経営形態であったことは、木製農具や大足・田下駄等の出土からも推定することが可能である。おそらく生産や消費を共同とする小集団による開田と耕作が行われたのであろう。それに適合した水田立地は、最上川の後背湿地や扇状地扇端部の湧水帯であり、その微高地や自然堤防上に集落が営まれた。

六世紀以降の古墳時代後期には、相変わらず前代からの集落や水田が引きつづき利用されるが、もっと最上川に近い場所に進出したり、扇状地扇央部から山麓地帯にまで遺跡分布は拡大をみせる。これは灌漑技術の進展と畑作経営が可能となったこと

を示している。この時期に山形盆地においても、西南部に偏在する古墳は、盆地内各水系に出現することになる。それらは個別的に初期ヤマト政権の影響下に、これまでの一系支配から新たな支配機構へ、さらに律令政権による地域統合への道を開くことになる。

古墳時代における地域統合の首長やそれに連なる有力者の墓である古墳は、その多くは最上川かその支流にあたる流域に分布をみる。しかしながら最上川にきわめて近い場所に立地する例として、余目町榎島古墳・村山市名取古墳・同河島山古墳群・寒河江市高瀬山古墳などをあげることができる。

榎島古墳は、庄内地域における数少ない古墳であるが、最上川の自然堤防上に築かれた箱式石棺を内部主体とするもので、かなり以前に掘り出されたものであり、筆者らが確認した時点では棺に用いられた石材のみが残存していた。いま余目町立資料館敷地内に復元されている。

名取古墳は最上川のすぐ東側の自然堤防上に位置し、すぐ直下を最上川が流れている。河島山から北三キロの丘陵がつづく微高地で、底径三十六メートルの円墳で、幅四・五メートルの周壕がめぐる。西側がやや破壊されている。内陸部では最北限の古墳で、後期古墳とみられる。

河島山は最上川三難所といわれる基点の東側に横たわる標高一九四・三メートルの丘陵で、古墳は山頂に近い東側斜面にあ

る。最初に発見されたのは一九四八年で、箱形石棺であることが判明した。その後村山市教育委員会により再調査が行われた結果墳丘基底部径二十四メートル、高さ二メートル前後の円墳で、幅四メートルの周壕がめぐる。内部主体は箱形石棺で、長さ一・七五メートル、幅四十センチ程で、凝灰岩の石材を組み合わせたものであった。二号墳は河島山南の丸森山頂にあり、径二十八メートルほどで内部主体は発掘されていない。

寒河江市街の南に、標高一二・五メートルの高瀬山の小丘陵があり、最上川の屈曲部に位置する。この丘陵は遺跡の宝庫ともいべきで、最近の東北横断自動車道建設により北側部分の発掘調査が行われ、旧石器時代から縄文前・中期・古墳時代前期の北限の方形周溝墓、奈良・平安期の集落跡、中世の経塚などが発掘されている。一九三二年山頂部の最上川を望むあたりから箱形石棺が発見され、なかから直刀が出土した。それは直径十八メートル、高さ五・五メートルの円墳で、もとは十数基の墳丘があったという⁶⁴。その一部が周壕のみ残存していることが最近の調査で明らかになった。

以上のように、最上川の近くの、それを望む場所に設けられた古墳がある。それらは明らかに最上川を意識し、その河川交通などに密接に関連する古代豪族の存在を示すものである。すべて六世紀代と推定される後期古墳であるが、この時期に一層最上川が交通上の重要な位置を占めたことがよみとれるのであ

る。

四、最上川と古代水駅

「最上川のぼればくだる稲舟の

いなにはあらずこの月ばかり」

古今和歌集にある「よみ人知らず」の和歌である。最上川が歌枕として、平安時代前期には、都の知識人の間でも知られるようになっていた。「最上川のぼればくだる稲舟の」は、「いな」という否定の語句にかかる枕詞で、とくに歌の内容にかかわる意味はない。しかしながらゆったりと最上川を往来する稲を積んだ舟の情景を示すものである。

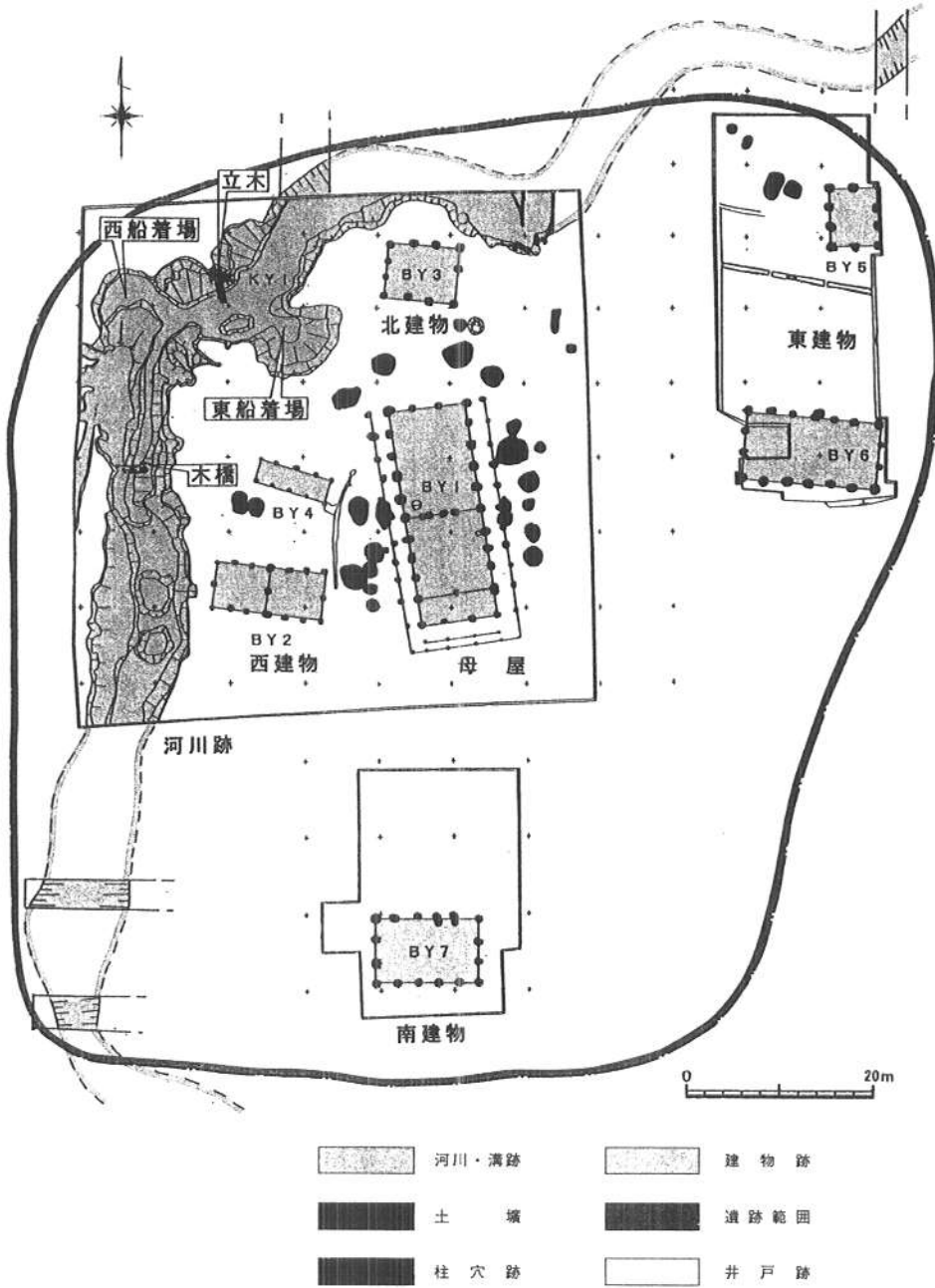
最上川が古代において交通や交易の重要なルートであったことは『延喜式』の「諸国駅伝馬条」(延長五年)に、つぎのように記載されていることからうかがうことができる。

「出羽国駅馬 最上十五疋 村山野^の後各十疋 避翼^{さばね}十二疋
佐芸^{さけ}四疋十隻 遊佐^{ゆざ}十疋 蛸方^{さかた}由利各十二疋 白谷七疋 飽海秋田各十疋。

伝馬 最上五疋 野後三疋五隻 由利六疋 避翼一疋舟六疋 白谷三疋船五隻。」

当時の出羽国の官道の駅次が記載されている。陸奥国から笹谷峠を越えた最初の駅が最上で、これは山形市東部と推定される。そして村山から野後に至るが、村山は東根市郡山のあたり

最上川と水田稲作の受容・展開



第5図 古志田東遺跡遺構配置図（同遺跡報告書による）

であろうか。そして野後からは駅馬の他五隻の船がおかれていたことがわかる。そこから避翼・佐芸・飽海まで船が準備され、野後から飽海の間は水駅であったことをうかがうことができる。水駅は全国的にも稀であり、最上峡の險阻な水道を通るよりも、最上川を下り水駅を利用する方が便利でもあったのだろう。野後は大石田町駒籠、避翼は舟形町長者原附近、佐芸は鮭川村真木附近、飽海駅は平田町飛鳥附近とする説が有力である。

飛鳥あたりで最上川から上陸すれば、飽海郡家とされる郡山をへて、平安期の出羽国府である酒田市城輪柵遺跡まで道路が通じていた。その間十六キロ余りである。そして出羽国府をへて遊佐駅を通り、三崎峠を越えて蚌方(象潟)へ向ったのであろう。陸奥国府から出羽国府をへて秋田城へ向う官道には、途中野後から飽海まで水駅がさかんに利用されたことがうかがわれる。

野後駅に擬定されている駒籠館附近は、中世の館跡でもあるが、一九九七・九八年度にわたり大石田町教育委員会により試掘調査が行われた。その結果では、九世紀後半を主とする土師器や須恵器に伴なって竪穴住居跡二棟と掘立柱柱穴跡などが検出されたが、駅家と断定できる明確な状況は把握できなかった。駅家とする条件には、①奈良・平安期に属する土器などの出土、②「駅」「厨」「倉」「馬」駅名などの墨書土器や木簡など駅の存在を示す文字資料の発見、③官衛風の建物、厨・倉庫廩舎な

どの建物跡の確認などが考えられる。

全国的にも駅家が明らかにされた例は少く、北上市新平遺跡、東山道の長野県小諸市の長倉遺跡、山陽道の広島県府中町下岡田遺跡、また静岡県浜松市伊場西遺跡(栗原駅)、また最近では山陽道小犬丸遺跡(布施駅家)、落地遺跡(野磨駅家)などがある。野後駅については、駅としての可能性は高まったといえるが、まだ断定できる資料には乏しく今後の調査に期待される。

駅が水駅として、最上川舟運による重要な役割をになったことについて触れたが、上流にあたる置賜地域においても最上川とその支流、またそれと連繋する小河川が交易や交流の上できわめて重要な位置を占める。米沢市中田町にある笹原遺跡では八世紀後半から九世紀にかけての竪穴住居跡九棟とともに、多量の炭化米の他に鍬・叩き棒・權などの木製品・円面硯三点などが発見された。注目すべきは「舟曾」と読まれる墨書土器が二十点余り認められ、また「×□宝私田曾□□」などと書かれた木簡が出土している。遺跡は最上川上流の松川に近い場所であり、この地に舟が多数あったことを示しており、多量の炭化米の出土などからも、官衛に付随した舟着場があったと推定されている。

さらに米沢市の南部にある古志田東遺跡は国指定史跡となり、目下史跡公園として整備されつつある。九世紀後半より十世紀

にかけての律令制衰退期における富豪層の屋敷地とみられる。十間の桁行をもつ巨大な掘立柱建物跡などに伴い、多くの墨書土器、農具・修羅・松扇などの木製品とともに木簡も発見された。それによると多数の農民を集めて労働力を編成し、農業生産や開発に従事する有力者が存在したことが明らかである。

木簡中に「□船津運十人」と書かれたものがある。船津は舟着場を意味する。この遺跡をめぐるように、西から南へ小河川がまわっている。そして運河とも思われるこの河は最上川上流にあたる松川につながっていくのである。この木簡も屋敷をめぐる河の舟着場から出土している。この地に居を構えた富豪層も、最上川の舟運を通じて各地域との交易に従事していたことが推測される。

庄園が地域に拡大するに伴ない、庄家や政所なども河川交通に利便な場所に設けられる例がある。例えば十一世紀に摂関家庄園として成立した最上川中流域の「成生庄」の一町四方を濠で囲まれた「二階堂」とよばれる遺跡も、すぐ北側を乱川が流れ最上川に合流する。

成生庄の南に位置する「大曾根庄」は、いまの山形市南西部の古くから開田された穀倉地帯であるが、当初藤原頼長の庄園であった。年貢増徴をめぐって、この庄園を管理する平泉藤原基衡との交渉の経過が「台記」の仁平三年の条にみえる。その中に大曾根庄からの年貢のなかに、布や馬とともに「水豹皮」

五枚がある。これはアザラシの皮で、この地域で獲れるものではない。庄園の有力者のなかに、はるばる遠く離れた北方との交易ルートをもつものが居り、最上川を溯ってこの地にもたらされたものと考えられる。

十二世紀から十三世紀にかけて、各地で営まれた経塚の経筒を掩う外容器や火葬墳墓の骨蔵器も大方は珠洲焼の中世須恵器である。能登半島の珠洲あたりの窯場で作られたものが、日本海を北上し最上川を溯上して内陸部にもたらされたものであった。また京都の近くで製作された経筒や鑑鏡などの鋳銅製品も多く発見されているが、同様のルートによるものであった。

こうして稲作が定着して以後古代においても交易品の流入や地域の生産物である米・布・漆などが最上川を経由して西日本へ送られたのである。

五、おわりに

以上、古代において最上川が舟運上に果たした役割について述べた。いま本県の基幹産業となっている水田稲作は、紀元前二世紀の弥生時代前期に伝えられ、諸遺跡にみられるように間もなく最上川を溯上して内陸部にも拡がりをみせた。それは弥生後期に気候の寒冷化から一時的に停滞がみられたものの、古墳時代に入るや復活して、前半期の五世紀には定着をみて、最上川流域の中流域においては、その後背湿地を利用した水田経営

が展開し、それらを基盤としてさらなる発展がはかられることになる。その時期の集落遺跡も盆地内低地部に一斉に出現をみた。

そして農業生活を基盤として、古墳時代後半期には各水系ごとに古墳群が営まれる。集落は最上川沿いの低地部のみならず、山間部にも拡大し畑作経営に加え、農業共同体の形成により大規模な灌漑が可能となり、より低地部や扇尖部にも集落が拡がりみせるようになった。

律令制下の奈良・平安期には、さらに最上川が果す役割が一層重要なものとなり、全国的にも稀な水駅が設けられる。出羽国においては陸上交通よりも河川交通の方がより利便であり、一度に大量の物流を可能とした。日本海を北上し、最上川を経由して、京のみならず西日本との交流が活発化した。それらは発掘された土器や各種の金属製品にもうかがうことができる。また国内のみならず中国・朝鮮などの文物もたらされた。大曾根庄より年貢として京の貴族のもとに届けられた水豹皮などは、北東アジアとの交易によるものと考えられる。まさに最上川は、ひろく東アジアと地域が結びつくルートでもあったのである。

〔註〕

- (1) 山形県教育委員会一九八六「生石2遺跡発掘調査報告書(2)」(山形県埋蔵文化財調査報告書第九十九集)
- (2) 東根市史編さん委員会「東根市史別巻上」
加藤稔・佐藤嘉広・二瓶由佳一九八八「最上川流域の弥生土器集成 資料編Ⅱ」山形考古 四ノ二 石井由佳一九九三「東根市蟹沢遺跡採集の土器(1)」山形考古五ノ一 一九九三年。
- (3) 河北町教育委員会二〇〇一「花ノ木遺跡発掘調査報告書」(河北町埋蔵文化財調査報告書第四集)
- (4) 佐藤庄一九九八「やまがたの弥生文化」(企画展図録やまがたの弥生文化―水田稲作の始まり) 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館。
- (5) 山形県埋蔵文化財センター 一九九四「今塚遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第七集)
- (6) 山形県埋蔵文化財センター 二〇〇一「長表遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第六十七集)
- (7) 山形県教育委員会一九八六「西沼田遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財発掘調査報告書第一〇一集)
- (8) 天童市教育委員会 二〇〇二「天童市西沼田遺跡第V次発掘調査概報」(天童市埋蔵文化財調査報告書二十七集)
- (9) 川崎利夫 一九九五「西沼田遺跡とその周辺―古墳時代後期集落跡の様相」天童郷工研究会会報 一三三号。
- (10) 川崎利夫 一九七三「山形盆地の古式土器」最上川流域の歴史と文化(工藤定雄教授還暦記念論文集)
- (11) 川崎利夫 一九八〇「古墳時代の庄内地方」庄内考古学 十七号。
- (12) 村山市史編さん委員会 一九八二「村山市史 別巻1 原始・古代編」(加藤稔執筆)
- (13) 註(12)に同じ。

- 04 寒河江市史編さん委員会 一九九四「寒河江市史上巻原始・古代・中世編」(宇野修平執筆)
- 05 石井浩幸 二〇〇二「古代野後駅擬定地の試掘調査」北村山の歴史四号(北村山地域史研究会)
- 06 手塚孝・亀田昊明 一九八一「笹原遺跡発掘調査報告書」(米沢市埋蔵文化財調査報告書第七集)
- 07 米沢市教育委員会 二〇〇一「古志田東遺跡」(米沢市埋蔵文化財調査報告書第七十三集) 手塚孝 二〇〇一「山形県米沢市古志田東遺跡」 日本歴史六三三九号
- 08 三上喜孝 二〇〇一「古志田東木簡からみた古代の農業労働力編成」山形県立米沢女子短期大学紀要第三十六号